

の中に入ってきてほしい。現在のところ学校は、非協力的な傾向にある。また、学校がもっている制度は、基本的には軍隊式が基礎になっていることを意識してほしい」。

一門恵子先生より「〈先生とスクールカウンセラーへのアドバイスは？〉子どもの強い機能を生かして、輝くことができるようにしてほしい。子どもの弱い所を責めないでほしい」。以上のような応答がなされた。

また、企画者のお一人である牟田悦子先生より、以下のコメントが述べられた。「不登校、性、虐待、学習障害と問題はさまざまだが、個々の子どものニーズへの支援という観点から見れば共通している。学校が、個々の子どものニーズに目を向け対応するためには、先生1人では困難で、学校内での先生たちの相互支援と、学校外の専門家との連携が必要である。学習障害については、相互支援を行う校内委員会の立ち上げと、専門家チームと巡回相談員という専門家との連携のシステムを全国的に整備しようとしているところである。このシステムには学習障害だけでなく、さまざまな子どもの問題がかかわってくる。何の問題であれ、それに対応しようとして学校が動いていることムービングスクールであるこ

とーが、先生と子ども双方を成長させるだろう。今回こうして多様な問題を概観することができたのは、学校と連携する教育心理学の専門家としてたいへんよかったのではないか」。

さいごに

伊藤美奈子

多様なテーマを盛り込んでの企画であったため、フロアとの十分な議論の時間がなく残念だった(司会として不手際をお詫びいたします)。しかし、このシンポジウムで味わった“熱のこもった慌しさと緊張感”は、多様な問題に追われ即時対応を求められる学校現場の実態を彷彿させるものであった。今後はより一層、教育心理学・臨床心理学の知見が学校教育で求められる時代が来るだろう。悪戦苦闘する教師とともに走り、考え、対応していける力(研究の力量や専門性だけでなく、現場との連携に求められる社会性や柔軟性も含めて)をつけていくことの必要性を痛感した。

末筆ながら、貴重なご提案とご意見をいただいた先生方、総会初日の朝一番からご参加いただいた学会員の皆様に、心よりお礼申し上げます。